

# 雲走天無動

諫山萌加(駒澤大学)

2022年夏、安東に旅行に行った。世界遺産として登録されている“ハフェ村”を見に行くためであった。私はその旅行で、運命的な出会いを果たした。

観光を終え、バスに乗るまでに時間があつた私は、近くにある民族博物館に寄ることにした。1階の展示を全て見終え2階に上がると、1人のおじいさんが展示場の一角にある机の前に座り、本を読んでいた。彼は私を見るなり

「お嬢さん、どこから来ましたか」

と言った。

日本から来たと答えるやいなや、驚くべきことに彼は流暢な日本語で、自分が書道家であること、ここで作品を売っていることを話した。あまりにも自然な日本語に、私は思わず日本人かと尋ねた。しかし彼は

「僕は今91歳で…。」

と切り出した。

ああ、その瞬間大変なことをしてしまったと思った。

「14歳まで僕は日本人だったんだ。」

衝撃だった。なんと言えればいいのか。ただ、日本人である私が彼の前に立っていてもいいのか、彼の気分を損ねないか、それだけが心配だった。私は無意識に

「…すみません。」

と一言言った。気まずさのあまりさっさとその場を離れようとした時、

「どうして謝るの」

彼は言った。

「ちょっと待って。お嬢さんにいいものをあげる。」

そう言って彼は筆を執り文字を書き始めた。

“雲走天無動”

雲走天無動—雲は流れても、空が動くことはない。周りがどんなに変化しようとも、本質は変わらない。

私はおそるおそる尋ねた。

「日本を恨んではいないでしょうか。」

「まさか。14歳まで僕に日本語を教えてくれた人は、“ヨシダ”という男だったんだ。今でも覚えているよ。“ヨシダ”は僕らにすごく良くしてくれた。”ヨシダ“のおかげで日本人を恨んだこともない。」

「日本と韓国は仲良くしなければいけないよ。それは僕がよく知っている。なぜなら僕たちはお隣さんなんだから。」

Yさん、聞こえていらっしゃいますか。

あなたのおかげで私は、韓国と日本が本当にもっと仲良くなればいいと、これから将来日韓親善に関わる仕事がしたいと、考えるようになりました。そのような思いから、気持ちがこもった言葉を正確に伝える経験を積もうと、通訳のボランティアも始めました。将来自分がどのような形で日韓親善に貢献できるのか、正直まだ悩み中です。しかし、雲走天無動一雲は流れても空が動くことはないように、これからどんなに周りの環境が変化しようとも、私の信条は変わりません。あの日私に勇気を下さったあなたへの感謝一心で、精一杯努めます。つらい環境でも隣人を愛する気持ちだけは変わらなかった、安東のとある紳士のように。